

特別企画

2月16日(土)

第1会場 11:30~12:20

デバイス治療の歴史と展望

座長 庭野 慎一 北里大学医学部循環器内科学

演者 新田 隆 日本医科大学付属病院心臓血管外科

共催：第一三共株式会社

シンポジウム

2月15日(金)

第1会場 8:30~10:00

シンポジウム1

本邦の心臓突然死とデバイス活用の現状

座長 清水 昭彦 宇部興産中央病院
三橋 武司 自治医科大学附属さいたま医療センター循環器内科

演者

1. 本邦の突然死予防の特殊性
志賀 剛 東京女子医科大学循環器内科
2. 本邦の突然死予防の実態
野田 崇 国立循環器病研究センター心臓血管内科
3. 本邦の一次予防実態とエビデンス
三橋 武司 自治医科大学附属さいたま医療センター循環器内科
4. 新ガイドラインの立場から
栗田 隆志 近畿大学医学部附属病院心臓血管センター

1990年代後半から MADIT, MUSTT, SCD-HeFT などの ICD 一次予防植込みのデータが欧米から発表されて、特に虚血性心疾患に対して欧米では積極的に一次予防植込みが行われてきた。しかし我が国におけるデバイス登録評価委員会の J-CDTR のデータを見ると ICD/CRT-D 植込み全体患者に対する虚血性心疾患の割合は約 40%に過ぎず、また一次予防植込みも約 40%に過ぎない。一方 Brugada 症候群、特発性心室細動は約 15%に上る。これら我が国独特の疾患特異性が今後も続くのか、デバイス治療は現在のままで良いのか我々はまだ十分なデータを持っていない。今回のシンポジウムでは我が国の突然死の疾患特異性、今までの我が国のデータを見直してみたい。現状では欧米のデータをもとに治療を続けて行かなければならないわけであるが、心不全に対する内科療法の進歩により突然死が減少し、デバ